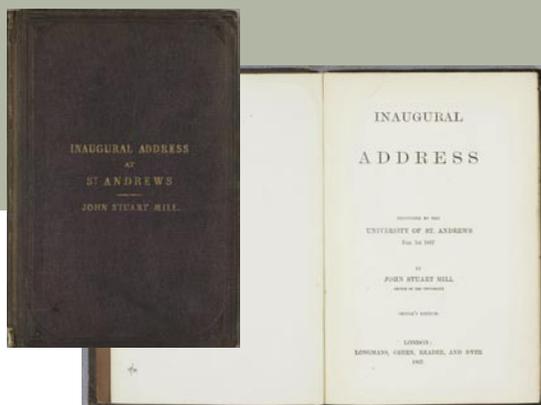


ブック村だより

本学コレクション紹介(13)

J・S・ミル『セント・アンドルーズ大学名誉学長就任演説』(1)

.....	高橋 哲雄 (1)
新館長就任特集 図書館とのふれあい	海堀 勲 (2)
ぶっくす・なう.....	(4)
『夜は短し歩けよ乙女』	谷岡 一郎
『百貨店の時代』	中野 安
『1万円の世界地図-図解 日本の格差、世界の格差』	佐和 良作
『無言館にいらっしやい』	下山 晃
学生の声.....	(6)
新図書館ホームページのご案内.....	(7)
インフォメーション・開館案内.....	(8)



本学コレクション紹介(13) J・S・ミル『セント・アンドルーズ大学名誉学長就任演説』(1) (1867年2月1日述、1867年2月刊、初版)

ミルは学校教育を受けていない。3歳でギリシャ語を父に学ぶという徹底した早教育のモデルとして、モーツァルトと双璧をなすだろう。

そのミルが父の故郷であるスコットランドで最古の大学セント・アンドルーズの名誉学長に選ばれた。その就任演説がこれで、大学教育のあるべき姿についてミルは熱っぽく語っている。

熱を込めたはいいが、話は長すぎた。ざっと数えて1万5000語。友人であり伝記作家であるペインは3時間かかったとほしている。当時のしん

ぼうづよい学生にとってもラクではなかったろう。彼の話は難解ではないけれど、地味で生まじめ、楽しく聴ける話ではなかった。

だのに講演は評判を呼び、すぐに1000部出版され、同じ月のうちに500部追い刷、翌月には安い大衆版が2000部、6月には1000部出ている。アメリカ版、ドイツ語訳もすぐに出、ハンガリー語訳も現われた。それは何といても内容が当時の人びとの関心につよく訴えかけるところがあったからだ。
(名誉教授 高橋哲雄)

図書館とのふれあい

図書館と云えば書物の活字を目で追い、内容を辿りながら思索する場所だと、ただ単純にそう思い込んでもいいだろう。ただ、館内で読書することには自宅の書斎とは別な、何か思索空間がとめどなく拡張していくという楽しさがある。外界から遮断された孤独な空間で書物に浸りこみ、視覚の遠近法に狂いが生じた瞬間—その瞬間から時間の急速なあるいは静かな流れが意識され、館内を縦横無尽に動き回る自分の後姿に遭遇することがある。本を読む自分を後ろから見るもうひとりの自分。今となっては過ぎ去った青春期の妄想に過ぎない。だが時には今でもまだスペースシャトルのように時空の中を、地球を逆方向に回っているような子供じみた夢見心地に陥ることがある。どこへでも好きなところへ案内してくれる図書館はまさに夢のスペースシャトル。商大の正門から新図書館を見上げるとき、なぜかしら過去と未来とが同時に見えるような気がする。

国会図書館、大阪府立中之島図書館、それにいくつかの大学図書館にも資料調査のため訪れたことがある。図書館好きという程ではなかったが、図書館特有の真面目過ぎる少し陰気な感じはなぜか嫌いではなかった。重厚な雰囲気から来る黙りこくった緊張感と倦怠感もひとたび館外へ出ると一気にほぐれたが、開放された時のあの陽気な気分もそれはそれで清々しく心地よかった。

商大新図書館は図書館旧来の陰気さを明るさに変え、真面目さにもう少し自由な雰囲気を加え、敷居をさらに低くするというイメージチェンジを実現している。採光と眺望にすぐれたユニークな円形設計である。

今年から図書館業務に携わる一員となった。昨日は図書館のあちら側にいた自分が、今日はこちら側にいる。以前は、自分の専攻分野中心に図書

館を平面的にしか見ていなかったのが、これからはこちら側から、昔日のようにまた、この立体空間を満喫できるのが楽しみだ。シンプルデザイン、思索のための館内空間は学生諸君を心から歓迎し、読書の楽しみへと誘ってくれることだろう。

滯仏の折、リシュリュール通りというルーヴル美術館周辺の道路に面した図書館を訪れた。パリの、楕円形ドームの閲覧室で有名なフランス国立図書館である。フランスという国は書籍の閲覧や予約でも長時間待たされることがある。現在は以前より迅速便利になり改善されているとは聞いている。その国立図書館でモンテーニュ『エッセー』（16世紀出版の希少本）のコピーを館員に依頼したことが昨日の様に思い出される。マイクロフィルム化になるが膨大な量なので製作に時間がかかること、それと、使用目的を国立フランス図書著作権協会（SNEF）で申請して許可を得るように、との返答だった。国立図書館（BnFと略す）の見積額はやや高額だったので、フィルムの一部についてはイギリスのケンブリッジ大学図書館に依頼してみた。確か0.7倍ぐらいの見積額だったと思う。（BnFの見積額をケンブリッジ大学に公表し英仏関係の微妙さに訴えたのが功を奏したの



『エッセー』表紙とモンテーニュ肖像

だろう)。今と違って当時はまだ煩雑で不便なことも多く、いろいろと苦勞したことが懐かしく思い出される。

文献学 (Philologie) という分野にとってエディション研究はもちろん必須の要素である。『エッセー』の原版と改訂版は16世紀末にそれぞれ初版刊行された。だから当然、正書法・統辞法は現代とはかなり異なっておりいわゆる古文なので現代のフランス人に理解できない語法も頻出する。アルファベットも現在の字体とはかなり様相が異なる。この『エッセー』希少本のマイクロフィルムを入手したときの喜びは今でも記憶に鮮明だ。(最近のニュースによれば、世界的に有名な16世紀原版を所有していたフランスの或る外科医の死後、それは競売にかけられ30万ユーロで落札されたらしい)

フランス国立図書館にはそうした古文書の原版を始めとして、世界各国の書籍そして特にフランス関連の書籍なら何でもすべてが揃っていると言っても過言ではない。18世紀初頭に現在のリシュリュー通りに移転したので、Site Richelieuと呼ばれる。一方、ミッテラン大統領の指示により最近建設された新館Site François-Mitterrandはそれとは別な位置にある高層ビルからなる。新館は同大統領の政治方針つまり最も近代的なテクノロジーを駆使し、(EUの盟主として)ヨーロッパの他の図書館との連携を深めようとの意図から建設されたと聞く。

因みに、Site Mitterrandの館内では歴史、哲学、法律学、経済学、政治学、科学技術、文学芸術、視聴覚などの各部門がそれぞれ別室になっている。一方、Site Richelieuでは演劇・芸術、地図、版画写真、自筆原稿・写本、古銭メダル、音楽・楽譜の各部門がそれぞれ別室になっている。さらにそれら旧館新館とは別に、メトロのオペラ駅周辺にオペラ図書・博物館がある。ここは音楽部門のコレクションの宝庫であり、とりわけ古文書を数多く蔵し、舞踊関係の文献資料も豊富であり、ユニークな存在として知られている。

刊行物カタログも次第に多様複雑化し、手書き、印刷、ファイル化されたもの、また20年前からは情報処理システムが完成されている。事業の一環として、博覧会を組織したりシンポジウムのような文化イベントを活性化する役割も果たしている。BnFもその財政基盤は必ずしも健全とは言えず、その一部を主にパリ近郊の大修道院や学校・大学から得ているのが現実である。教員・研究者の利用は多いが、学生の利用がそれを遥かに上回っているらしい。だが近年の図書館運営に対する批判は絶えず、利用者の不満は尽きない。相互の伝達遅延や読書室での騒音、文献資料利用上の不都合、採光や温度調節の不備など、世界中のすべての図書館が抱える問題が表面化している。

図書館は今現在岐路に立たされていると言えよう。だが、いかなる状況になろうとも、後世への文化伝承という任務を忘れてはならないだろう。文化は一般市民のものである筈。だから、少数の人間の手によって荘厳な陳列台を作り上げるのも悪くはないが、多くの人間の参加によって、実用性の方向を目指すのも悪くはなからう。「多様なニーズに答える」ということは、「開かれた」ということを意味するのだろうと思いたい。

商大図書館と共に多くの時間を過ごすこととなったこの機会に、各フロアーの隅々まで見つめ直したいと思っている。そして多彩な蔵書と共にこの館内で、忘れかけたあの雰囲気をもう一度じっくり味わってみたいと思う。

(図書館長 海堀 勲)

『夜は短し歩けよ乙女』

(角川書店, 2006.11)
森見 登美彦 著

この欄は皆があまり知らないおススメ本、特にミステリーやSFを紹介することになっている。しかし今回は大ブレイク中のわりと良く知られつつある本で、ミステリーとは言い難いものを取り上げた。理由は簡単、純粋にオモシロイからだ。

京都の、とある大学生の恋愛物語だが、とにかくヒロインの人物設定がイイ。ワキ役陣も豊富で、あっという間に読み終えるだろう。我々関西人に馴染みのある地名がたくさん登場する。むろんこの手の小説につきものの、「ご都合主義」の塊だが、話のテンポが早く、文章も書き手の知性を感じさせるものだ。随所でみられる「小ワザ」やモノのネーミングも秀逸である。

本書は4つの短(中)編の連作の形態をとっているが、個人的には、古本屋を舞台とした2作め

がピカイチと思う。特に子供のワキ役が光っていた。むろん残り3作もツブ揃いの名作だ。森見登美彦は、ファンタジー大賞を取った「太陽の塔」でデビュー。その後「四畳半神話大系」、「きつねのはなし」など、いずれも京都に住む「ボク」が主人公となる、よく似た設定で書かれた小説がある。

正直言って、「太陽の塔」のあとは、少々クライ感じの話が続いた(この欄でもあえてススメない)が、今回の作品で大きく脱皮したように思う。次回は「京都のボク」から離れ、別路線の内容にチャレンジしてほしい作家であるし、この作品を読む限りそれができるはずである。

(学長 谷岡 一郎)



『百貨店の時代』

(産経新聞出版, 2007.1)
西谷 文孝 著

小売業の有力業態である百貨店は「危機」とか「厳冬の時代」とかいわれて久しい。それは端的には、既存店売上が10年にもわたり前年割れを続けていることに現われている。1世紀以上も存続してきたこの業態の存続自体が問われているのである(それは基本的にアメリカでも同様である)。

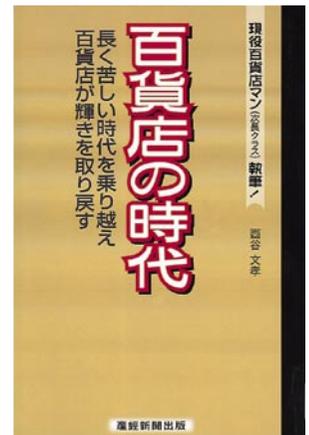
こうした状況下できびしいリストラが進められるとともに、それが一段落した最近では、アメリカの動きに追随するかのよう、業界の大規模再編が生じている。大丸と松坂屋、阪急と阪神、伊勢丹と東急等、大規模な経営統合や提携の動きがそれであり、やがて4つほどの巨大グループに集約されるのではないとの観測もなされるほどである。こうした動きは、百貨店が存続のためには旧

来の保守的経営を脱し、新たな構想のもとに積極的経営へと転換せざるをえないことを示すものでもあろう。

本書は、現役の百貨店マンが、最近の百貨店が輝きを取り戻しつつある状況をいきいきと、多面的

に明らかにしたものである。それと同時に、百貨店の歴史やさらなる発展のための積極的提言もなされている。全体的に大変読み易く、「なぜ慶応大出身者が多いか」等、肩のこらないコラムもある。

(総合経営学部教授 中野 安)



『1万円の世界地図 —図解 日本の格差、世界の格差—』

(祥伝社新書、2007.3)
佐藤 拓 著

少子高齢化、年金破綻、教育崩壊などと並んで、ここ2～3年大きな問題となっているのが格差の拡大という問題である。所得の世代間格差、地域格差、同世代での賃金格差、さらには格差が次世代に引き継がれていることなど、さまざまな点が指摘されている。

この書は、100あまりの話題を選び、データを豊富に使って日本の格差、世界の格差を取り上げている。ほとんどの話題は2ページに取りまとめられており、右のページは文章、左のページはデータという体裁となっており、電車の中などで読むのに都合がよい。

驚くような格差の事例が数多く示されており、また大半の人たちは何気なく日本は豊かで暮らし

やすい国だと思っているとされるが、実は決してそうではないということが書いてあったりして、実に面白い本である。

いくつかを簡単に紹介すると、

①格差の固定化

(格差が次世代に引き継がれる)が

起きており、東京の足立区では、2人に1人が給食費や文具代などの就学援助世帯である。

②国民の8人に1人が消費者金融から借金中。

③4分の1の世帯が預貯金ゼロ。

④イギリス・レスター大学の調査では、日本の幸福度は178か国中90位。

⑤一人当たり国民所得は11位。

(経済学部教授 佐和 良作)



『無言館にいらっしやい』

(ちくまプリマー新書、2006.7)
窪島 誠一郎 著

自分のお父さん、自分のおじいちゃんの学生時代のことを知っていますか？

この本で紹介されている無言館には、ぼくの父親の世代、君たちのおじいちゃんの世代の「戦没画学生」が遺(のこ)した作品類が展示されています。無言館の作品は、一言も言葉を語りません。

その作品を観にくるお客さんたちも、なぜか、一言も言葉を発しません。「もっと良い作品を描きたい」「これが自分の最後の作品になるかも知れない」……そんな思いを抱きながら、戦没画学生たちは両親や妹や恋人、なつかしい故郷の風景を描き、そして戦場から帰っては来ませんでした。そんな画学生と同じ年頃の君たちには、きつと無言館のことが良くわかるはず。そして、

この本を無言で読み終えた後、幾つもの言葉が自分の胸の中で響き始めるはずなのです。

この本は、大事なことを幾つも教えてくれます。家族の結びつきとは何だろう？ 若いうちに勉強するって、一体、どういうことだろう？ 国家とは？ 表現とは？ 人が精一杯生きるとは、一体ぜんたい、どういうことなんだろう……？ その問いかけの中に含まれた大事なものは実は元々、全部、君たちの心の中で無言のまま眠っていたものなのです。この本で紹介された画学生たちの作品には、君たちのおじいちゃんの世代の命が、静かに輝いています。

亡父連れ 花冷えの先 無言館 響太郎

(総合経営学部教授 下山 晃)



『焦らない、焦らない。 一休み、一休み。』

経済学部 経済学科2年 新田 将也

突然ですが、読書とは、「①ページ一杯に印刷された文字を読み、②内容を理解し、③頭の中で映像化し自分なりの世界を作り上げ、④楽しむ。」という作業の繰り返しです。今、多くの人は「読書は面倒」という意見を持っています。私は、少しでも読書を愛する人を増やしたいと思い、図書館学生スタッフとして活動しています。

しかし、どんなに私が読書の良さを訴えたとしても、世の中には映画という便利な代物があります。映画を見てしまえば、「②内容を理解し、④楽しむ。」という作業だけで十分なのです。一例として、私の周りには、「ハリーポッターは2作目くらいから映画で済ませることにした。」とい

う人がたくさんいます。もちろん、映画にも可愛かったハリーが段々と男前な声変わりを遂げていく様子や、夢のような世界をより身近に感じられる長所があります。しかし、本にだって長所がたくさんあるのです。

最後に、私が伝えたいことがあります。それは、私がスタッフとして推薦する本は、とても読みやすい内容の物であるという事です。できるだけ面倒臭がらないで手にとって欲しい。ただ、それだけです。

私も、面倒になって読書を辞めてしまう事があります。そんな時は、気分を変えて漫画を読んだりメールをしたりと、気分転換をします。読書なんて、ゆっくりでいいんです。ゆっくりと、焦らず。例えば面倒でも、また今度、気が向いた時に読めばいいんです。一休み、一休み。

〔以下、図書館より〕

学生スタッフのお薦め本は、学生選書コーナーにご本人のコメント付きで展示されています。



『かごを持って本屋を歩く』

総合経営学部 経営学科2年 高瀬 千尋

「好きな本を図書館に入れてもらえる！」、とばかりに選書ツアーに参加させていただきました。

何を隠そう（隠す価値もないですが）、今回のツアー会場であるなんばジュンク堂に私はここ10年ほど月1ペースで通い続けています。が、かごを持って店内を歩くなんて初めての経験で、もうそれだけでわくわくどきどきが止まりませんでした。

今回、是非とも大商大図書館に入れてほしかった本がありました。『天の瞳』という小説です。先頃亡くなった灰谷健次郎さんの遺作ともなった小説で、大商大の学生の中でも教職をとっている方にお勧め致します。『太陽の子』などで知られ

る灰谷さん独特の低い目線で倫太郎という少年の保育園時代から中学校までを描いてあります。現代の社会問題を見据えるとともに読んだ後、清々しい気分になります。

もう一冊あげると『若者殺しの時代』。これはジュンク堂で表紙を見てピンときた本です。「若者は大人にゆっくりと殺されてきた」なんて大仰な文句だと思いませんか？この本には図書館でポップも付けさせていただきましたが、読みやすい文章で1970年代頃からのサブカルチャーを知ると同時にこれまで若者がどんな風にして大人に「殺されて」いったかが分かります。ちょっとした気分転換に読むにはちょうどいいですよ。

軽く選んだ本を紹介させていただきましたが、これらからも分かるように図書館を利用する皆さんの興味など全く斟酌しない選択となってしまう、大変申し訳ない思いでいっぱいです。私の選んだ本を皆さんが手に取ってくれますようお願いしています。

新図書館ホームページのご案内

今回は図書館ホームページから利用できるようになったもの、および無料で公開されている有用なデータベースを紹介します。



国際金融情報サービス〔学内〕

財団法人国際金融情報センターが提供する、国際金融に関する調査研究のトピックやレポートの公開を行っているサイトです。各国の概要、問題点、特徴を総合的に分析した、下記のようなさまざまなレポートを閲覧できます。報告書はPDFでの入手が可能です。

- ・ 国別予測・レーティングレポート
- ・ 総合評価レポート
- ・ 経済指標
- ・ 基礎レポート（各国の政治・経済・社会全般にわたる基礎情報を網羅した、長期的構造的視点からのレポート）など。



官報情報検索サービス〔学内〕

官報（本紙、号外、政府調達公告版、資料版、目録）をインターネットで検索できる会員制サービスです。

収録期間：昭和22年5月3日（日本国憲法施行日）以降～当日発行分

※当日分は午前11時以降に公開されます。

館員が代行検索を行いますので、利用希望者は図書館カウンターまで申し出て下さい。

最近1週間分までなら無料で検索・イメージ出力が可能です。無料検索サービスのURLは下記の通りです。

URL：<http://kanpou.npb.jp>

図書館ホームページ「データベース検索」メニュー内に表示されているロゴマークをクリックして頂いてもアクセスできます。

テーマ別調べ案内〔国立国会図書館、無料公開〕

国立国会図書館が提供する、巨大情報源です。例えば、最初のページにある「テーマ一覧」（「政治・法律・行政」など）、「特色ある資料群」（「法令資料」「官庁資料」）の2種類のインデックスをクリックすると、概要や解説、調査ツール、関連機関へのリンク紹介などを参照する事ができます。その中の1つである「統計資料レファレン

ス・ガイド」というリンクからは、代表的な統計資料について内容別に詳細な解説、入手方法、関連機関へのリンクなどが掲載されています。「総合統計書」の項では、『総合統計書 特徴・収録分野対照表』という、「各資料間の比較を簡単に把握できるように、取扱分野等の特徴を一覧可能にした」（同サイト本文より）一覧表が閲覧できます。（『日本統計年鑑』や『日本国勢図会』など19種類の統計資料について、web公開・キーワード索引・解説の有無、価格、分野などが対照されています）

同ホームページを訪れる事により、「参考図書紹介」や公共図書館の和図書が横断検索できるシステム、電子図書館などの様々なメニューから、図書館の最先端の姿を窺い知ることができます。今年4月にリニューアルされています。是非一度訪れてみて下さい。



資料番号	31.1	31.2	31.5	31.4	31.5	31.6	31.7	31.8	31.9	31.10	32.1	32.2	32.3	32.4	32.5	32.6	32.7	32.8	32.9
資料名	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査	国勢調査									
Web	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キーワード	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
解説	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
価格	E	A	T	C	B	C	E	T	A	A	A	E	E	C	B	C	E	E	
国主	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
人	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

URL：<http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme.html>

図書館インフォメーション

◆本年度より、館外貸出の冊数・期間を下記のように変更しました

利用者種別	冊数	期間
学部1・2回生	8冊	2週間
学部3・4回生	10冊	1ヶ月
大学院生	30冊	3ヶ月

◎延滞罰則のペナルティについても変更しています。

返却日が平成18年度3月末まで	返却日が平成19年4月以降
延滞日数の3倍の期間、貸出停止	延滞日数と同一の期間、貸出停止

◆「新入生生活応援Books」を展示しています

新生活の「居」「食」「住」に役立つ図書を、2階特設コーナー（図書館入口付近）に展示しています。自炊のためのレシピや、ひとり暮らしのための安全ガイドなどがあります。是非チェックしてみてください。

◆図書館分室の利用方法の変更について

図書館分室は3月より、職員が常駐しておりません。雑誌バックナンバーの閲覧利用を希望される際は、蔵書検索機能で所在を確認のうえ、図書館2階カウンターへお申し出ください。

◆平成18年度下半期に寄贈された本学教員著書は下記の通りです。

（教員名50音順、敬称略） ※配架場所は、本学教員著書コーナーです。

【田崎公司】『地域社会とリーダーたち』/吉川弘文館, 2006.12

【谷岡一郎・美原融・佐和良作】『団塊の楽園』/弘文堂, 2007.2

【長尾和英】『子どもの育ちと教育環境』/法律文化社, 2007.2

【中津孝司】『アフリカ世界を読む』/創成社, 2006.10

【前畑安弘】『保険法講義』/中央経済社, 2000.4

◆夏期休暇期間中の長期貸出について

夏休みの学習・研究用に長期貸出サービスを行います。実施期間中は図書の貸出すべてに適用されます。手続きは通常どおりです。詳細はポスター・掲示板でお知らせします。

開館案内

日 月 火 水 木 金 土
 1 2 3 4
 5 6 7 8 9 10 11
 12 13 14 15 16 17 18
 19 20 21 22 23 24 25
 26 27 28 29 30 31

日 月 火 水 木 金 土
 1
 2 3 4 5 6 7 8
 9 10 11 12 13 14 15
 16 17 18 19 20 21 22
 23/30 24 25 26 27 28 29

●は休館日です。（開館時間：月～土 9：00～20：00）

上記以外にも臨時休館日を設ける場合があります。

開館日程および時間に変更されることがあります。詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第30号 平成19年5月31日 発行 大阪商業大学図書館
 〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10 電話(06)6781-5280 FAX(06)6781-0089
 e-mail : lib@oucow.daishodai.ac.jp ホームページアドレス : <http://www.lib.daishodai.ac.jp>

ISSN 1346-8928